

受難の主日（枝の主日）の説教

金 大烈 神父 2010年3月28日（日）

《私たちがいつも主を称えることができますように！》

おはようございます。皆様私たちの人生、予想がつく方が便利でしょうか？ 予想がつかない方が便利でしょうか？ もし予想がつく人生だったら幸せになると思われるのでしょうか？ それとも予想がつかない方が楽だと思われるのでしょうか？ とにかく私たちの望みとは関係なく、与えられた人生は予想がつく時もあるし、予想がつかない時もあります。

今日の福音（ルカ 23・1-49）でイエス様はエルサレムに入ります。そして十字架につけられて亡くなります。イエス様がエルサレムに入る時ご自分のことについて予想がついていたのでしょうか？ イエス様には先のことがはっきり見えたんです。それでゲッセマニの園で血の混じった汗を流されるほどの痛みを感じながら御父に祈られたんです。「もしこの杯を拒むことができるのなら取り除いて下さい。しかし、あなたのみ旨に従います。」そういう祈りを終えて、エルサレムに入る決心をしたのです。イエス様がいつもおっしゃっていた言葉であるその「時」が来ました。イエス様にはすべてのことが予想できます。「私がエルサレムに入ったら沢山の人が手を振りながら私を称えるだろう。しかし、その同じ口、同じ手で『十字架にかけろ。殺せ、殺せ』と叫ぶだろう。そして私は御父が準備した十字架の道を歩まなければならないだろう。その間にいろんな気の毒な人々にも出会うだろう。」そういう予想がはっきり見えたわけです。

もし皆様が先の時間がはっきり見えたとしましょう。その時間が気持ちよく、喜ばしいものでなく、自分の命を捧げなければならないとしたら。死刑の判決を受けた人が「明日はあなたの死刑の日です。」と言われた時、どんな気持ちになるのでしょうか？ 「辛い」という言葉では十分ではないと思います。すべてが見えたイエス様は御父のみ旨に従順に従われます。子口バに乗って「ホザンナ、ホザンナ」の声を聞きながらエルサレムに入られたイエス様の心はうれしかったのでしょうか？ 辛かった、悲しかったと思います。手を振っている人々の目を見ながら憐憫を感じたと思います。「あなたたちはどこまで行くのか」そのような嘆きの心を持ったと思います。

そして十字架上で最後に何とおっしゃいましたか？ 「私の霊を御手に委ねます。」

この最後に残して下さった遺言をどのように理解すればよいのでしょうか？ 信仰の道であっても、信仰の道でなくても先ははっきり見えません。しかし、カトリック信者でありイエス・キリストを救い主と信じている私たちなら少なくとも最後の時は予想しなければなりません。その時「私のすべてをあなたに委ねます。」と告白できるのでしょうか？ このような言葉は、いつも繰り返し申し上げていますが、ある日突然には言えません。いつも準備した心、日常生活の中でそのように生きたいという心を持って練習しながら実践しながら、だんだん、その決定的瞬間に自然に出る言葉だと思います。

予想がつかない人生がほとんどです。しかし、はっきり見える未来もあります。それは皆様も私もすべての人間が帰る道はただ一つしかないということです。この最後の門が新しい人生に入る素晴し

い門になるか、それとも神様を失ってしまう暗闇の門になってしまうか、それは今の私たちの生き方によって決まることを私たちは解っています。十字架の道を歩むことを決心したイエス様のみ心を推し測ってみましょう。結局「ホザンナ、ホザンナ」と叫んだ口と「殺せ、殺せ」と叫んだ口はまったく同じであることをもう一回考えてみましょう。同じ空間、同じ時間の中で「殺せ」と叫ぶこともできるし「ホザンナ、ホザンナ」と称えるきれいな歌を歌えることを意識しましょう。ちょっとしたことでどちらかに偏ってしまいます。ここに「いつも目をさまして祈りなさい。」というイエス様のみ言葉のわけが隠れています。

今日から聖週間に入ります。一週間後にイエス様は復活されます。皆様が四旬節をどのように過ごされたかわかりませんが、四旬節に入るといろんな誘惑、いろんな苦しみを感じることもあると思います。今まで仲の良かった人と気持ちが通じなくなってしまうように感じられたり、順調にいていたことが止まってしまったり、わけもない感情が湧いたり……。敏感な方は感じられたと思います。その時が恵みの時であることを教会はいつも話しています。そのような状況に負けるのか、打ち勝つのか、それによって私たちの迎える復活祭の喜びが大きくなるか、ただの一年の行事にすぎなくなるかが決まるのではないかと思います。皆様、私たちの口からできる限りこの世を賛美する、救い主を賛美する、愛を賛美する言葉ができるように、そういう人々になるためにがんばりましょう。

ありがとうございました。